

抗菌薬適正使用につながるDiagnostic Stewardshipの取り組み

尿路感染症編

菅谷 彰

JA秋田厚生連 大曲厚生医療センター

Diagnostic Stewardship (DS) は、抗菌薬適正使用を支えるうえで重要な取り組みである。当院では尿路感染症領域におけるDSの実践を模索する中で、理想と現場のギャップを実感しており、その解消に向けて試行錯誤を重ねている。検査前プロセスでは、看護師へのアンケート結果から中間尿採取の手技遵守率が低いことが明らかとなり、教育的介入や環境整備の必要性が示唆された。検査プロセスでは、保存条件を適切に管理し、検体の精度担保を図っている。検査後プロセスでは、大腸菌検出時には簡易同定を行い、迅速報告に努めている。耐性菌に関する簡易報告も行っているが、抗菌薬選択にまで踏み込んだ支援には至っていないのが現状である。今回の取り組みを通じて、検査プロセスの最適化が診療に付加価値をもたらし得ることを再認識した。本シンポジウムでは、理想と現実の間で模索する過程を共有し、現場に根差したより良いDSの実践に向けた一助となれば幸いである。

呼吸器感染症編

伊豆野 良太

山形大学医学部附属病院

感染症診療の精度向上には、適切な検体提出とその評価、検査法の選択、臨床に寄り添った報告が重要である。特に呼吸器感染症における喀痰培養では、検体の質が診断精度に大きく影響する。また、抗菌薬適正使用の観点から、検査結果を臨床の判断材料として有効に提供することが検査室に求められている。本発表では、当院における呼吸器感染症関連の微生物検査の取り組みを、検査前・検査中・検査後の各プロセスに分けて紹介する。検査前では、オーダー内容の工夫や啓発活動を通じて適切な検体提出を促している。検査中では、塗抹検査による起炎菌推定、耐性菌選択培地や質量分析装置による迅速同定、アンチバイオグラムの活用を実践している。検査後では、解釈コメントの記載や、AST・ICTとの連携、必要時には臨床医への直接報告を行うなど、臨床との情報共有を重視している。本シンポジウムを通して微生物検査室の果たすべき役割を再確認し、より効果的な診療支援のあり方を皆様とともに考えていきたい。



血流感染症編

草間 文子

国立大学法人 新潟大学医歯学総合病院

血流感染症の診断において血液培養は不可欠（もしくは必須の検査）であり、本検査は感染症診療における迅速かつ正確な診断、ならびに適切な抗菌薬治療の選択において重要な役割を担っている。各施設では、血液培養検査の性能を最大限に引き出すため、さまざまな工夫がなされていることと思われる。当院においても、実情に即したかたちで、検体採取から結果報告に至る各プロセスに対して複数の取り組みを行っている。とりわけ近年は、質量分析装置や遺伝子検査装置の導入により、適切なタイミングで治療に有用な情報を提供できる体制の整備を進めてきた。さらに、これらの利点を活かした報告方法の工夫や、AST（Antimicrobial Stewardship Team）との連携にも積極的に取り組んでいる。

本シンポジウムでは、臨床へのさらなる貢献を目指す当院微生物検査室の取り組みを紹介し、今後の発展に向けて皆様と意見交換を行いたい。